日本の「非異性愛の女」の恐れと不可視性
―調査研究への影響―

虎　岩　朋　加

はじめに

本稿は、非異性愛の女の不可視性、そして、その結果としての、非異性愛の女たちを調査の対象とすることにともなう困難を論じるものである[1)]。これには、不可視であることの背景である恐れと、恐れを生み出す社会体制についての考察を含む。また、対象者とのアクセスの過程で、また、インタビューの中で、恐れがどのように表出するかについても描く。

非異性愛の女の不可視性とは、以下のいずれかの状態であることを示す。すなわち、異性愛でないという気づきを自己自身が否定している、異性愛でないという認識をもつが、その認識を誰とも共有していない、その認識は閉ざされた空間の中でのみ共有されている、などである。非異性愛の女に直接対面して、異性愛でないということをめぐる経験についての話を聞きたいという場合、その対象は、異性愛でないという認識を受け入れていて、さらに、閉ざされた空間であれ、あるいは開放された空間であれ、誰かとその認識をすでに共有しているか、または、共有しても良いと思っている人となるだろう。ただし、開放された空間において、誰とでも非異性愛であることを共有している人であるならばいざ知らず、閉ざされた空間の中にしか存在していないならば、まずは、その空間内にアクセスすることが求められるが、それは容易なことではない。

私たち[2)]は、2017年4月から、Comparing governance of lesbian communities in Singapore and Japanという研究課題に取り組んでいる。研究の目的は、シンガポールと日本というアジアの二つの国で、周縁化された人たちの経験に、それぞれの統治のメカニズムがどのように働いているのか、周縁化された人たちの統治のメカニズムに抗する行為主体が、それぞれの国の文脈の中でどのような表現をとるのかということを明らかにすることである。具体的には、非異性愛の女たちが、みずからを社会の中で見える存在としたり、あるいは、見えない存在としたりすることをめぐって、制度や社会やコミュニティと、どのように折り合いをつけたり、切り抜けたり、掛け合ったりしているのかを問うている。現在、調査の実施過程の段階にあるけれども、参加者を募る過程における、調査の対象となる

可能性のある人たちへのアクセスは、当初予想していたよりも困難であった。現在のところ、日本においては、これまでに32名の参加を得たが、参加者募集の過程の困難を思うと、この人数の参加を得ることができたこと自体、信じられない思いがする。シンガポールについては、現在のところ9名が聞き取りへの参加を承諾してくれた。

日本での調査で私たちが経験した調査対象となる可能性のある人たちへのアクセスの困難は、調査対象者の募集のプロセスにおいて露呈した。調査協力者の募集は、雪だるま式方法[3)]、つまり、協力者の知り合い、そのまた知り合いと紹介してもらいながら、参加者を募集する方法で行う予定であったが、そもそも最初の雪玉が形成されないのである。その理由に、調査対象となる可能性のある人たちが、日常生活の中で見えない存在であるということがある。そして、見えない存在であるのは、かれらが、可視化されることへの恐れを懐いている、あるいは、恐れを懐かされているからである。

本稿では、恐れを生み出す社会規範である異性愛主義と性差別について考察した後、非異性愛の女が自らを隠し守る理由としての恐れがどのように表現されるのか、調査対象者の募集のプロセスを通して、さらに、協力者たち一人ひとりの語りの中に、明らかにしていく。

1　研究の経過と方法

2017年8月に行った予備調査では、複数の当事者グループに連絡を取り、それらのグループのうち、会うことを引き受けてくれた二つのグループと面会し、私たちの話を聞いてもらい、また、かれらのグループ活動について説明を聞き、レズビアンをめぐる現状についてかれらが思っていたり考えていたりすることについて話を聞いた。最初のグループとは、コアメンバー4名と私たち2名、合計6名でのミーティングを行った。二つ目のグループとは代表者1名と会った。また、当事者グループとつながる人たちや、公的機関、教育機関からも調査についての助言を得た。

予備調査を手がかりとして、私たちは、個人インタビューで焦点を当てたいテーマや質問項目の原案を作成し、さらに検討を重ねて、インタビューでの質問を確定した。

この研究課題で採用している主な調査手法は半構造化インタビューである。すなわち、研究の対象となる人たちとの対面での聞き取りである。半構造化インタビューの聞き取りでは、調査者側の用意した調査の関心となる質問事項に沿って行われるが、しかし、構造化されたインタビューのよ

うに、どのサンプルに対しても同じ質問を繰り返して、得られる回答を統制するようなことはしない。被調査者が語りたいことを語れるように質問していく。「なぜ」や「どのように」などといった質問を中心に、被調査者が「はい」「いいえ」ではなくて、語りの形で答えていくことができるようにインタビューを構成していく。被調査者がもし質問から離れて語り出しても、そして、それが調査の主題とは関係がないように感じても、それをさえぎることはしない。

半構造化されたインタビューの方法を採用した理由は、私たちの研究プロジェクトが、シンガポールと日本という二つの国における非異性愛の女性であることをめぐる経験の分析を意図しているからである。インタビューを導く構造がまったく不在の完全に自由なインタビューをしてしまうと、それぞれの国での研究への協力者の語りの焦点が一致せず、比較ができなくなる可能性がある[4)]。ある程度の構造がなければ比較は不可能である。そのような理由から、半構造化されたインタビュー手法を採用した。

2018年4月から本格的に個人インタビューの実施を始めた。前年度に連絡をした当事者グループを手掛かりに、知り合いを紹介してもらい、協力の同意が得られれば、さらにその知り合いを紹介してもらうという、雪だるま式の方法で、研究協力者を募った。先述した通り、日本では32名の協力を得ることができた。シンガポールでは、9名の協力を得ている。インタビューは現在も実施中である。

日本のインタビューに関して言えば、調査者の間で言語の壁があるため、インタビューを実施するごとに、私たちはミーティングを開催し、そこでどのようなことが語られたのかを共有した。ミーティングを通して、私たちは、テーマとして見込まれる共通事項を抽出する作業も同時に行っている。シンガポールでの協力者数が、日本のそれに比して少ないため、データ分析作業は、この後もしばらく続く予定である。

2　恐れと不可視についての理論的背景

聞き取りでは、主に、非異性愛であることの経験をめぐって、参加者に質問をした。つまり、参加者は、聞き取りに参加する時点で、異性愛ではないという自己についての認識をもっているということである。そして、参加を決めて、その場にやってきたということは、異性愛ではないということに関する自己の経験を、見ず知らずの他者に語る用意があるということを示唆する。もちろん、その場に臨んだとしても、それでもやはり自己の経験を明快には語らないという選択肢はありうる。調査者が想像してい

たような人とは異なっていただとか、その日の気分がよくなかっただとか、参加を承諾してから聞き取りの場に臨むまでに、非異性愛であることをめぐる経験を語ることを思いとどまらせるなんらかの経験をしただとか、語らない選択をする理由はいくらでもあるだろう。しかし、それでも、聞き取りの場に臨むということにおいて、いったんは、自己の経験を語ることに同意したことを含意する。

非異性愛であることをめぐる経験を語るということは、現在の日本社会において決して容易なことではないし、私たちは日常の中で、非異性愛であることをめぐる女の経験の語りを耳にすることはない。それは、なぜだろうか。異性愛であることが想定される社会のあり方、そのあり方が非異性愛の女にいかなる影響をもたらしているのかをみていこう。

（1）異性愛主義と性差別

この社会は、人々が異性愛であることを想定して構成されている。異性愛を規範として構成されている社会では、異性愛者は、自分が異性愛者であることにいつ気づいたかを意識することもなく、異性愛者であることに気がついて悩むこともなく、また、悩むことがないためにその悩みを乗り越える必要もない。つまり、異性愛であることは、問題をもたらさない。したがって、異性愛者が「セクシュアリティ」について語る場をえたとき、掛札悠子が描く、以下のような事態が起きる。

> 「自分のセクシュアリティについて話してください」、そう言われたら私は、いつ、なにがきっかけで自分が「同性愛者」であることに気がついたか、そのことでどれほど悩んだか、どうやってそれを乗り越えたか、あるいは乗り越えきれていないかを話すに違いない。（中略）では、異性愛者は同じ質問にどう答えるだろう？ ゲイの知人から「自分のセクシュアリティについて話してください」と言われて、私の友人はひどく困ったという。彼女は私と同い年、1990年の中絶可能時期の二週間短縮問題をきっかけに「セクシュアリティ」を中心に置いたミニコミを発行し続けているような人だから、「セクシュアリティ」について話せずに困ってしまったわけではない。その場にいたゲイの面々が、先ほど書いたような「同性愛者が語るセクシュアリティ」を話したのを聞いた後で水を向けられたために混乱してしまったのだ。[5)]

「同性愛者が語るセクシュアリティ」と同様のストーリーが「異性愛者」に成立しないのは、「異性愛であること」という記号の中に、具体的な意味内容がないからである。「異性愛者は、生涯をつうじて異性と性交渉をもたなくても、またもとうと思わなくても、同性愛者でない限り、異性愛者でいることができる。つまり、異性愛者かどうかを弁別する要素は、異性愛を実践しているかどうかではなく、同性愛を実践していないかどうかとなる」[6)]。「異性愛を実践する」ということ自体は空虚な記号であり、「異性愛」は「同性愛を実践していない」ことだけで規定される。だからこそ、異性愛者は同性愛者と同じようにはセクシュアリティのストーリーを構成しえない。

ここに見られるのは、「異性愛」と「同性愛」という二つのカテゴリーの非対称性である。あたかも「異性愛」という概念は、「同性愛」という概念の存在なしには成立しえないかのようだ。

> 同性愛とは、ある個々人に固有の確固たるアイデンティティであるというよりは、「異性愛」の定義を万全にするために作られたひとつのカテゴリーのことなのだ。それは対立する概念として設けられたカテゴリーであり、したがってそれ自体ではなんら本質的な意味を持たない。けれども、このことは異性愛が「自然」または「内在的」な何かであるということを意味しない。実のところ、異性愛は棄却された他者としての同性愛がなければそれ自体では存在できないのである。[7)]

「異性愛」という概念は、「同性愛」という概念をもってはじめて、その存在を確かにする。「異性愛」という概念を強固なものにし、さらに支配的なものにするために、「同性愛」の概念は、意味付けられていく。「異性愛ではないあり方」に、「同性愛」という名を与え、同性愛にあたるものを分類し、その中身を分析し、分析することで可視化させ、「異性愛ではないもの」として特殊化されていく。そのような一連の作業を通して「同性愛」というカテゴリーそのものが、特異なものとして見出されていく[8)]。「同性愛」が特異なものとして見出されていく過程は、同性愛を抑圧の対象として生み出していく過程でもある。「同性愛者というカテゴリーを作り出すことによって同性愛抑圧が可能となり、その結果、異性愛が規範として正当化されるという、前後転倒的なメカニズムが稼働しているのである」[9)]。「同性愛者」が、歴史上、「病人」、「犯罪者」、「性倒錯者」とみなされてきたのも、抑圧作用の効果である。

同性愛を抑圧し、それでもって、異性愛を規範として正当化するというメカニズムは、異性愛主義（ヘテロセクシズム）と性差別（セクシズム）が相互に結びついて作り上げる社会構造の現れでもある[10)]。異性愛主義とは、男女の性愛を唯一の自然で合法的な性愛のあり方とみなす考え方であり、その考え方を前提にして諸制度が構成された社会のあり方である。異性愛中心主義の社会では、男女が結婚し家庭という生殖の場で子どもをもつことが当然とされている。学校でも、職場でも、異性愛が前提とされ、法的諸制度も、異性愛結婚や核家族モデルを前提として、構築されている。また、見逃してならないのは、異性愛主義は、性差別をともなっているということである。性差別社会においては、「男」というカテゴリーに振り分けられた人に、社会的な力が偏在する。社会的な力の偏在によって、性別に上下関係をともなう意味づけがなされ、男女が階層的に位置付けられる。性についても男女で異なる基準が導入され、その間に差別が生み出されていく[11)]。

同性愛が忌避され、制裁の対象となるのは、男女の階層的な位置付けを同性愛者であることが脅かすからである。とくに、男性の優位性を脅かす存在としての男性同性愛者への社会的制裁は厳しいことが知られている[12)]。ゲイ男性に対する暴力事件などはその一例であろう。2000年1月から2月にかけて、東京の公園で、男性たちが、複数の若者たちに暴行を受けたり、強盗されたり、強盗の上殺された事件においては、若者たちは、「同性愛」であることを理由に、男性たちに暴力をふるったという[13)]。

同性愛者の懐く恐れは、このような直接的で物理的な暴力によってのみもたらされるだけではない。日本における同性愛嫌悪の言説もある種の暴力を振るう。それは、「文化的な『許容』を与えるかわりに差別を隠蔽することであり、それによって同性愛者という主体を非在へと導くような、西洋的ではないもう一つの抑圧形態に他ならない」[14)]。日本における同性愛嫌悪の言説は、同性愛をあからさまな憎悪や撲滅の対象としないが、また、同性愛も、同性愛嫌悪の存在自体も、正面から取り扱われず、徹底的に回避される[15)]。

（2）レズビアンの不可視化

女性にとって、同性愛差別の事態は、性差別とあいまって、その複雑さを増す。なぜなら、女の同性愛が可視化されたのは、それまでの「ロマンティックな友情」と形容される女同士の関係性が性愛化されたからである[16)]。すなわち、女同士の関係性は、性的なものとして認識されることとなった。性愛化による可視化は、レズビアンを以下のように定義することにもなる。

「すなわちレズビアンとは、女に対する性的欲望を明確に自覚し、それを実践したいと思っていたり、あるいはすでに実践したことがあるものだという定義である」[17]。女の同性愛が性愛化されたことによって、女の同性愛、すなわち、レズビアンには、性愛の言説がつきまとうことになる。

このレズビアンの性愛のイメージが、掛札のいうポルノグラフィのイメージに折り重なるのである。掛札は、人々が無意識のうちに「レズビアン」をセックスという柱に縛り付けていると指摘する。「女と女の間にある親密さは、その『セックス』によってのみ表現され、また、それで十分に表現できるかのように信じこまれてしまっている。」「女と女の間にある親密さ」をセックスによってのみ表現することは、「レズビアン」という人間存在の非在を確かにするものである。それはただ、「『セックス』のヴァリエーションとしての『レズビアン行為』を認めていることでしかない」[18]。

自己を可視化させることで、性的な存在として印づけられ、すぐさま人間存在としては非在にされる。「異性愛の規範から逸脱する女」たちは、毎日の暮らしの中で、性的な印づけが自己の身体に招きうる暴力やハラスメントにつねに恐れを懐きつづけるだろう。一見、女の同性愛に理解を示すような善意的言動が、実は自己を「性的存在」としてしか見ていないことの裏返しにすぎないこと、そのような「寛容」の覆いをかぶった同性愛差別にいたるところで出会うはずだ。このような言動は、人間存在としてではなく、性的な存在としてかれらがみなされていることを、かれらに思い知らせる。

さらに、同性愛差別社会の中で、その影響を明に暗に受け続け、「規範を逸脱した存在」として、同性愛差別を内面化する。

> レズビアン個人の考えかたや行動のしかた、レズビアンが作る関係は、この社会のレズビアン差別・レズビアン嫌悪によって日常的に影響を受けている。つまり、この社会にはレズビアンに対する嫌悪と差別が存在するのである。そうした環境のもとでは、レズビアン自身、「レズビアン」という存在を肯定することができない。レズビアンは、自分自身の「今ある姿」を素直に肯定することができないまま、生活をし、他人との関係をつくらなくてはならないのである。[19]

自分自身が「レズビアン」という存在を肯定できず、「劣った存在」「まともでない」「自分はおかしい」「変態の一種」と言ったような暴力的言説としてのホモフォビアを自らのうちで自分自身に振るうことになる。

非異性愛の女たちは、自己を守るために、見えない存在になる。女を愛する女自身も自らの不可視化に参与しているのである。不可視化に参与せざるをえないそのような力が、自身の内側にも外側にも働いている。

そのことが、非異性愛の女をして、セクシュアリティを語ることを忌避させるのである。自分自身を可視化させれば、性的な存在と見なされる。見えないままであれば、孤独から逃れられない。非異性愛の女が、自分が他の人たちとは違うことにどこかの時点で気づき、それとどう折り合いをつけるかを悩み、他の人たちが「人とは違う自分」をどのようにみなすだろうか恐れ、その悩みや恐れを乗り越えるための方策を探し、自分のような人とつながりたいと望み、しかし、つながるためには自己を可視化せざるをえず、可視化した場合に遭遇しうるさまざまな否定的な経験を恐れ、非異性愛の女は、望みと恐れの間で引き裂かれる。

3　恐れと不可視の表現

実際、非異性愛の女は、恐れをどのように体験するのか。調査への参加者の語りを手がかりに、異性愛でないことによって経験するであろうと思われる暴力への応答としての恐怖がどのように表出するのか探る。そして、調査への参加者を募る過程で私たちが経験した、自らを隠し守る調査の対象となる可能性のある人たちへのアクセスの困難を描く。

（1）語りにみられる恐れ[20)]

最初に描くのは、公的空間における非異性愛の女たちの振る舞いを制限する方向へ導く恐れである。現在同居中のパートナーがいるある回答者は、不特定多数の人がいる街中であれば、手をつないだりする。つまり、他者に対して、かれらが異性愛ではないことが明らかになるふるまいを、公の空間ですることがある。また、二人で旅行しているときや、宿泊先でも、意識的に、パートナー同士であることが、他者にわかるように行動する。これを二人の「草の根運動」と回答者は呼ぶ。人々が日常生活の中に非異性愛の女を目にする機会を作ることで、かれらが無意識には誰もが異性愛だと思っていることを意識化してもらう、または、非異性愛の女が「ふつうにいるんだ」と思ってもらうようにする、そのための行為でもある。しかし、こうした「草の根運動」も全く知らない他者の中だからできる。パートナーと互いの地元を訪れる時は、パートナー同士だと見えるような行為はしないし、できない。回答者は、母親にだけ自分が異性愛でないことを伝えており、また、パートナーの場合、父親、母親、きょうだいの誰もそ

のことを知らない。

親しい友人、共通の友人の間という閉じられた空間、または全く知らない他者の中であれば、かれらはパートナー同士としてふるまうことができる。しかも、時には、意識的にそのようにみなされるように行動している。しかし、かれらを知る人がいる可能性のある空間では、かれらはパートナー同士であるということから、かれら自身、距離を取らなければならない。そして、非異性愛の女というあり方を自ら不可視にする。それは、親やきょうだいに伝わってしまうかもしれないという恐れ、親やきょうだいを知る人に見られてしまうかもしれないという恐れ、そして、それによって、どんな形であれ、親やきょうだいとの関係性を否定的な方向へと変容させてしまうのではないかという恐れの現れとしてみることができるだろう。

同じ恐れは、パレード[21]に初めて参加したことをめぐる同じ回答者の経験にも当てはまる。パレードの企画の一つにパートナーが関わっていたことから、パレードを歩くという経験をはじめてしたときのことである。それは、ストレスの多い経験だった。不特定多数の人たちからおびただしい数の写真を撮られて、「すごい見世物」になってしまったことに疲れを感じたという。あれほどの数の写真を撮られることについては、事前に聞いておらず、また、予想もしていなかった。のちに、パートナーが、パレードの写真の中に知り合いを同定していたのを見て、さらに衝撃を受けた。同じことは自分にも当てはまるかもしれないからである。数多くの写真のうちのどれかに撮影されているかもしれないし、また、自分を知っている誰かが自分を見つける可能性がある。もちろん、回答者はすぐさま、その可能性を自分自身で打ち消した。パレードを歩いている人が、必ずしも当事者でないことは、皆知っている。それでも、当事者であることの蓋然性が高いこと、パレード自体は全国のメディアで報道されること、それを見る人たちの中には、知り合いもいるだろうということ、その中には自分が非異性愛であるということを知らない人も含むかもしれない、このような可能性の堆積が、ストレス状況を引き起こした。地元では非異性愛の女としての自分を不可視にする。自分の意志の範疇外で可視化されてしまったがゆえに、必ずしもそうでなくても、「同性愛者」であるとみなされる可能性がある、そのことについての恐れであり、最初に描いた恐れと地続きのものである。

別の回答者の恐れは、男との交際ということをめぐって表現される。過去に男と交際関係をもったことのあるこの回答者は、自らをバイセクシュアルと呼ぶが、それでも話の中で明確にされたのは、男とのセックスは、

相手を満足させるためのものであり、他方、女との性的関係は、お互いを満足させるためのものだということであった。それでも男との関係を担保としてもとうとするのは、「レズビアン」であることに対する社会的な制裁を知っているからであろう。たとえ、快楽のレベルにおいて、自分自身は満足できないものであったとしても、そして、相手を満足させるためだけのものであっても、外側に向けて提示する自己像によって、社会的制裁を免れることができるのであれば、男との交際は、自己を隠し守ることのできる一つのあり方なのである。

男との関係についての同様の話を別の回答者からも聞いた。ただし、こちらはより交際の方に焦点をおいたストーリーである。この回答者は、何人かの男と交際したことはあるが、交際していた当時も、実は彼らをそんなに好きではなかった。女の子といる方が楽しかった。男と交際しているときは自分らしくいられなかった。関係の中で、主導権は男の方にあり、自分はリクエストをしたり許可を求めたりする存在であり、それは上下の関係のように感じられた。フェアではない関係であった。男との関係において自分らしくいられないとしても、男と交際をするのは、社会の規範である異性愛の関係性に自分を紛れさせ不可視化することの現れだとも言えないだろうか。実際、この回答者は、女の子にひかれてしまう自分を、長い間受け入れられないでいた。初めて女の子にひかれている自分に気づいたとき、「私、レズだ」と思ったと同時に、「まずい」「認めてはいけない」と自分に言い聞かせ、無理やり男の子と付き合ったという。

また、別の回答者は直截に、「怖さ」は、世間体からくるものだと述べた。この回答者の大学からの親友の一人がレズビアンだったが、親友の家族にとっては、そのことは結婚しないことを意味した。家族の反対にあってその友人は悩んでいた。ひるがえって自分は、もし日本で法律上同性婚が可能になったら、自分ならばできるのではないかと考えた。なぜなら、同性婚へのあこがれがあり、また、家族の反対も押し切る自信があったからだ。しかし、職場での「同性愛」についての他者からの評価を目の当たりにして、このような自信をなくした。回答者は看護の学校で仕事をしていたが、看護の実技実習で、同性愛とみられる学生をどう扱うかが、会議の議題としてあがった。実技の授業では、看護学生たちが自らの身体を使う場合もあり、身体を互いにさらす必要もある。問題になったのは、そのとき、何か間違いが起こったらどう対応するか、ということであった。「同性愛」とは性的な存在であるという世間の理解が、ここに端的に現れている。こうしたことの積み重ねがこの回答者にとって「世間体」を構成する。

そしてその「世間体」は回答者に怖さという感情、同性愛であることを世間がどう評価し判断するのかということへの恐れをもたらす。回答者の友人も、親から受け入れられず、男と付き合いを始め、半同棲をしているという。その友人が「レズビアンだった頃のこと」は、人の間では話題にもならない。回答者自身も、インタビューの時点で、男と交際をしており、結婚の話題も出はじめているという。

問題は、非異性愛の女というあり方ではない。問題は同性愛差別である。同性愛差別は「世間体」という蓑をかぶってかれらを覆い、逃げ場のない環境を生み出している。逃げ場のない同性愛差別の環境のなかで、かれらは常に恐れを懐き続ける。いつか、自分のことがわかってしまわないかと、いつか、正体がバレてしまわないかと思っている。「男との交際」をすることも、「パートナー同士として振る舞わないこと」も、「写真を撮られることにストレスを感じること」も、同性愛差別環境の中で、透明な存在になるための、不可視化するための、かれらの生存のためのすべなのだと言える。だからこそ、声を聴こうとしても、姿が見えない人たちにどのようにアクセスできるかという困難な問題が浮上するのである。

（2）隠し守ることによる不可視化

参加者の語りの中でさまざまなあり方で表現された恐れは、現実のものであり、恐れは、当事者を当事者の間で隠し守ることへと導く。恐れは、結果的に不可視性をさらに強固なものとする。

日本において、調査への協力を得ることが難しかった理由の一つに、当事者のグループ、そして、そのグループを組織し率いる人が調査への協力の可否を統制したことがあげられる。

ある当事者グループを率いる人物であり、面識もあるAさんに、調査への協力が可能な方、つまり非異性愛であるという認識をもつ女性の紹介を依頼したのは2018年4月のことだった。この当事者グループは、セクシュアル・マイノリティが参加する自助グループであるとともに、セクシュアル・マイノリティ当事者による講演活動も行なっている。新年度が始まったところでの依頼であったため、何人か心当たりの人に当たっていただいたとのことだが、新年度の忙しさや異動などの理由で良い返事をもらえないとの返事があった。そのため、２、３ヶ月後に改めて連絡をしても良いかどうか尋ねたところ、連絡を待ちますとの返事があった。

数ヶ月たち、改めて連絡を取ってみたところ、顔の知らない人の直接対面のインタビューは不可能との返事をもらった。当事者会に参加してまず

は面識を作る方が良いという助言をもらったので、当事者会開催予定があれば、ぜひ知らせてほしい旨、返事をした。また、Ａさんのグループ主催のイベントの広報についても協力させてもらいたい旨、連絡をした。しかし、その後、Ａさんからの返事は途絶えた。

Ａさんとは面識があり、私たちがどういう仕事をしているのかについてもＡさんはご存知であったため、知り合いに協力の依頼をしていただけるのではないかとの期待があったが、期待した通りには運ばなかった。参加してくれる可能性のある人たちに安心していただくために、研究を説明する手紙や、どんな質問を聞く予定かなども事前に知ってもらう目的で質問リストなども送ったのだが、そのグループから協力者を得ることはできなかった。

この場合、当事者グループとそのリーダーは、グループに参加する人たちを守護する働きをしたのだと言える。私たちは、個人のプライバシーを守ること、研究を通して得ることとなるさまざまな個人に関わる情報は、特定の人と結びつけられないように、データからその可能性のあるあらゆる情報を消去することなど、手紙を通して説明したのだが、日本社会における同性愛差別に由来する恐れを懐かせないほどには、説得的でなかったのかもしれない。いずれにせよ、協力を得ることができなかったのは、一つに、自己の秘匿してきた事柄―秘匿しているのはひとえに、それが知られたら他者からの差別や偏見や暴力にさらされるかもしれないという恐れからくるのだが―その事柄を、面識もない全く知らない他者に語ることへの抵抗があるだろう。そして、もう一つに、インタビューはいずれどこかの時点で研究報告や論文などの形で発表されることから、隠してきた非異性愛というあり方が、人々に知られ、自分と結びつけられるのかもしれないという恐れがあるだろう。そうした恐れが現実のものとならないように、この当事者グループは、非異性愛の女たちを隠し守る働きをしたのである。

私たちが連絡をとった別の当事者グループも、同様に隠し守る働きを示したのだが、その帰結は、全く異なる方向へと向かった。このグループのリーダーのＢさんはレズビアンの自助グループとしてこのグループを立ち上げた。Ｂさんは、恐れを現実のものとしないために、潜在的な協力者に安心を与えることを念頭に、研究の説明をさらに明確にするための多数の質問をくれただけでなく、手紙のフレーズをどのように変えたらいいのか、どのようなルートで参加者を募ったほうが良いのかなど、私たちに、さまざまな助言をくれた。私たちは、その助言にしたがい、Ｂさんとのやりとりを通して、より分かりやすく、または不安や危惧を懐かせないように、研究の概要や目的に説明を加え、手紙にさまざまな配慮を加えて表現を変

更した。Ｂさんとのやりとりを経て、Ｂさんは、私たちを、さらなる協力者に紹介してくださった。また、この時点でも配慮があり、研究参加者がＢさんの知り合いに偏ってしまわないように、私たちに、Ｂさんの知り合いが別の協力者を紹介してくれないかどうか尋ねてみることを勧めた。

Ｂさんの知り合いのＣさんも、研究協力者を募る別の方法を考えてくださり、また別の知り合いであるＤさんも、Ｄさんが個人的に知っていて当事者グループとは関わりのない人たちを紹介してくださった。ＢさんもＣさんもＤさんも同じ当事者グループで活動している人たちである。ＢさんやＣさんやＤさんの協力があって、協力に承諾してくれる人たちの数が日に日に増加していった。

研究協力を依頼する過程で、ＡさんとＢさんの研究への関与は、私たちに異なる結果をもたらしたけれども、どちらも、非異性愛の女たちを隠し守る働きであったことに、共通点を見出すことができる。ＡさんとＢさんの隠し守る働きの結果の差異がどこからくるのかについて、ここでは分析しないが、かれらのゲートキーパーとしての役割によって、グループに参加するメンバーたちの不可視性が維持されている。

おわりに

本稿では、非異性愛主義と性差別が相互に結びついて同性愛差別として非異性愛の女たちに現れること、同性愛差別は、かれらの日常を取り巻き、またかれらの自己の内にも内面化されていて、内側からも外側からも、非異性愛の女に可視化に対する恐れを懐かせていること、そして、その結果、不可視化にかれらを参与させていることを論じた。非異性愛の女たちが懐く恐れを、一連の同性愛差別のメカニズムの観点から理解することは、私たちにとって重要であった。不可視化された存在としての非異性愛の女たちへのアクセスを試みるとき、その過程で、私たちはその背後にある異性愛主義と性差別のメカニズム全体を相手にしているということを、私たちに理解させたからである。回答者の語りから、また、協力者へのアクセスの過程で、私たちは、かれらの懐く恐れのさまざまな表現を見てきた。そしてかれら自身が、自ら不可視化に参与するあり方も見てきた。その恐れを意識的にあるいは無意識的に表出させながら、それでも、私たちに語ってくれたかれらに、純粋に敬意の念を覚える。これまで調査に参加協力してくれた人たち、そしてこれから参加してくれるだろう人たちに敬意をいだきつつ、私たちは引き続き研究調査を進めていく。

謝辞　本研究は JSPS 科研費 JP17K02091 の助成を受けたものです。

註：

1) 私たちの研究調査は、「非異性愛の女性」を対象としている。私たちは、研究費の申請の際、研究の対象となる可能性のある人たちのことを「レズビアン」としていた。しかし、研究を進めていくうちに、「レズビアン」という名づけが適切かどうかについて悩んだ。インタビューに参加してくれた人たちの多くが、「レズビアン」と自分を名指すことへのためらいを感じている。かれらが一致して認めているのは、自らを「異性愛」であると形容できないことである。私たちは、こうしたことから「レズビアン」という用語ではなく、「異性愛ではない」または「非異性愛」という言葉をインタビューの中で使うようになった。

「レズビアン」という名前へのためらいの背景には、いくつかのことが挙げられる。参加者の多くが、過去、または、現在に男と恋愛関係にあった（ある）ため、自分を完全にレズビアンとは形容できないと考えていること、レズビアンという「正しい」名前より日本においてすでに広く伝わっていた「レズ」や「ホモ」という言葉で自分を理解してきたため「レズビアン」という言葉が言いづらかったり、しっくりこなかったりすること、主に、「レズビアン」とは女と性愛関係にあることを含意すると考えられているため、そうではないあり方を意識していること、それから、セクシュアリティを形容する名は現在細分化しつつあるが、意図的に別の名前で自己を形容することなどである。

こうしたさまざまな理由から、調査への協力者たちの多くが、「レズビアン」という名前に自己を同一視することを避けている。調査への協力者たちの自らの名付けを尊重し、私たちはかれらを最も包括的な語、つまり「異性愛ではない」または「非異性愛」という言葉で形容することとした。ただし、そのように形容することがいいのかどうか、正直にいえば、いまだにわからない。なぜなら、「異性愛ではない」という語は、必然的に「異性愛である」という語に依拠しているからであり、「異性愛ではない」と呼び続けることは、逆に「異性愛である」ということの規範を何度も承認し続けることになりはしないかと思うからである。

「レズビアン」のほかに、「同性愛」という言い方もある。どの語を使うことが最も適切なのか、社会学的観点、政治的観点、文化批評的観点からは、さまざまな議論があるが、私たちは、分析的な観点から、協力者たちの語りに忠実であることを優先し、「異性愛ではない女性」「非異性愛の女性」という語を使う。

2) 私たちとは、本論文執筆者の虎岩朋加と共同研究者の Kris D'Amuro を指す。

3) Bogdan, Robert., and Sari Knopp Biklen. *Qualitative Research for Education: An Introduction to Theories and Methods*. Boston, Mass.: Pearson A & B, 2003, p. 64.

4) Ibid., 96.

5) 掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社 1992、50 頁。

6) 竹村和子『愛について－アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店 2002、 6 頁。

7) ヴィンセント、キース、風間孝、河口和也、『ゲイ・スタディーズ』青土社 1997、66 頁。

8) Foucault, Michel. *The History of Sexuality: An introduction, vol. 1*. New York: Vintage Books, 1990.

9) 竹村、前掲書、59 頁。

10) 竹村は、異性愛主義と性差別の結合した複層的な同性愛差別のメカニズムを「［ヘテロ］セクシズム」と呼ぶ。竹村、同書、36 － 37 頁。

[11] 性に関する男女の間の性差別については、次代再生産がもっぱら家庭の中で担われることを中心としたセクシュアリティが規範とされることによる効果が、男女に異なって働くことを意味する。すなわち、男の場合は、次代再生産に帰結しない性的快楽を家庭外に求めることによる負の制裁は働かないが、女の場合、家庭外に次代再生産に帰結しない性的快楽を求める場合の社会からの制裁が厳しいなど、性に関する二重基準が働くことがその一例となる。

[12] 現在でも同性愛差別による暴力が、ゲイ男性に対しては殺傷事件となる場合が多く、レズビアンにたいしては「レイプによって彼女たちの『目を覚まさせる』というかたちをとる傾向がある」と竹村は指摘する。竹村、同書、50 − 51 頁。

[13] 風間孝、河口和也、『同性愛と異性愛』岩波書店 2010、125 − 144 頁。

[14] ヴィンセントほか、前掲書、47 頁。

[15] ヴィンセントほか、同書、109-111 頁。

[16] ロマンティックな友情は、17 世紀、18 世紀、19 世紀にアメリカやヨーロッパで中産階級や上流階級で見られた女同士の親密で感情的な結びつきを指す。フェダマンによれば、これらの関係性は、結婚生活で求められる愛情を実践するリハーサルの場としてみなされたという。女同士の関係は、時には結婚ののちにも続けられたことが、かれらの手紙や日記などからわかっている。また、女たち自身も、性実践とはみなさなかった。Faderman, Lillian, “Introduction to the chapter 1,” Lillian Faderman ed. *Chloe Plus Olivia - An Anthology of Lesbian Literature from the Seventeenth Century to the Present*. New York: Viking, 1994, pp. 3-7.

女同士の親密で感情的な結びつきは、昭和初期に日本でも女学校を中心にみられた現象である。1910 年代当時に日本に輸入された性科学の言説をかりながら、同性間の親密な関係は、「仮の同性愛」である限りにおいて、つまり、その行き着く先に結婚がある限りにおいて、「近代家族の私的領域の担い手となるにふさわしいとされる資質、すなわち他者への思いやりや協調性、家庭運営の責任を負えるだけの自主性など」を意味する「『女性らしさ』が涵養されるというメリットがあったから」学校側では、これらの関係性を完全になくしてしまおうとしていたようではないと、赤枝は分析している。赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版、2011、190 頁。

以上のように、ロマンティックな友情は、異性愛中心主義と性差別のメカニズムを脅かすものではなかった。あくまでも、結婚制度を補完するものとしてあり、一方では、異性愛の結婚生活のリハーサルとして、他方では、異性愛の結婚生活において女に求められる資質を育む場所としてみなされた。

[17] 竹村、前掲書、65 頁。

[18] 掛札、前掲書、42 頁。

[19] 掛札、同書、105 − 106 頁。

[20] 2018 年 3 月から個人インタビューを行っている。名前など個人が特定される恐れのある情報は全て削除してある。インタビューの時間は、60 分から 180 分で、回答者の年齢は、20 代から 60 代である。

[21] セクシュアル・マイノリティの権利と解放を訴えるパレードで、世界各地で開催されている。